

信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス

比嘉麻美子・岡本祐子

The formation process of the adolescents' future time perspective based on the feeling of trust

Mamiko Higa and Yuko Okamoto

本研究では、青年の未来展望の形成とそれに影響を与えると考えられる信頼感の基盤としての重要な他者との関係を明らかにすることを試みた。研究Ⅰでは数量的分析によって、将来への希望は自己への信頼と、将来目標は他者への信頼と相関が高いことが明らかとなった。研究Ⅱでは、研究Ⅰで得られた知見に基づき半構造化面接を行い、循環の形を示す青年の未来展望の形成プロセスが見出された。また、重要な他者との関係を分析したところ、未来展望の土台としての信頼感が示され、未来展望の形成には、モデルとなる他者との出会いを契機として、その他者との関係に自分なりの意味づけを行っていくことが重要であることが示唆された。

キーワード：未来展望，信頼感，青年期，アイデンティティ，時間的展望

問題と目的

Erikson(1959)によると、青年期の最も重要な心理社会的発達課題は、青年がいかにしてアイデンティティを確立していくかという点にある。このアイデンティティの感覚の一つの側面は、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意識と確信であり、このような確信の上に立って個人の未来がはっきりと具体性を持って現実的なものとなる(杉山,1996)。この観点から、青年期に時間的展望を確立し、これからの自分の未来展望を築くことはアイデンティティ形成の一側面と考えることができる。青年期には、これからの人生を決定するような重大な決断を下すことが迫られ、青年は自分の未来を求めて模索する。しかし、将来の展望を確立する過程には様々な困難が伴っており、青年はなしうることやなすべきことが不確実であるゆえに、容易に葛藤や混乱の状態に置かれる(日高・前田, 1989)。そしてその困難はその時期によって、またその課題に立ち向かう個人の側の要因によっても異なる。特に近年は自らの未来を切り拓くことが時代や社会から要請された切実な問題であり(e.g. 大橋・恒藤・柏木, 2003), 青年が希望をもって未来展望を築くことは一層重要となっている。

では、青年の未来展望はどのようにして形成されるのであろうか。光富・長尾(2000)は、これまでの未来展望研究では、未来展望の形成に関する領域の研究成果は十分にはあがっていないことを指摘した。また、杉山(2000)によると、青年期の未来展望は多面的な性格を持ち、それぞれの側面

の発達経路が異なることが推測されるため、その広がりや発達の変化は未来展望変数単独ではなく、先行要因や関連要因との関連の中で検討されなければならないが、本邦においてはほとんどなされていない。

青年の未来展望を形成する要因の一つとして、他者との関係があげられる。Erikson(1959)は、信頼という基盤のもとに希望が生まれると述べた。また、北村(1983)は未来への信頼が自分の内外に求められることを指摘した。つまり、自分への信頼と他者への信頼という表裏一体をなす「信頼感」が未来に希望を抱く土台となると考えられるのである。

Erikson は、アイデンティティが他者との関係の中で形成されることを重視しているが、アイデンティティの概念を実証しようとしたこれまでの研究では、西洋的な男性優位の個人主義の中で、自律性や他者からの分離を発達の最優先課題としたものだった(杉村,1998)。そこで近年、「個」の側面のみではなく、「関係性」の側面をも含めてアイデンティティを捉えることの有用性が指摘されている。アイデンティティの側面である時間的展望についても、白井(2004)は“時間的展望は個人が人生経験のなかで生み出すが、それは対人的な文脈の中で生み出される”ことを指摘しており、「関係性」の視点を含むことの重要性が示唆される。発達過程において、人がどのような他者と出会い、どのような関わりをもっている(またはもってきた)かが重要な意味を持つことはこれまでに多くの研究からも示唆されてきた。日常、私たちは様々な人から影響を受けて暮らしており、その中で自分にとって重要な他者との関わりが未来展望に影響を与えることもあり得るだろう。例えば、ある一定の期間、自分の未来に対して不安や迷いを感じ希望を見失ったとしても、人生の先輩である誰かを理想としたり、誰かと悩みを共有したりすることによって、未来へと向かうことができることもあるのではないだろうか。

以上のことより、未来への希望は信頼感が土台となっていると考えられ、未来を模索する青年の未来展望とは他者との関係の中で構築されていくものであると考えられる。そこで、青年の未来展望の形成とそれに影響を与えると思われる信頼感の基盤としての「重要な他者」との関連を明らかにすることを本研究の目的とする。

研究 I

目的

青年の未来展望と自己への信頼感との関連を、数量的尺度を用いて明らかにする。

方法

(1)調査対象及び調査時期

A 大学生 359 名(有効回答者数 347 名、男性 162 名 女性 175 名 不明 10 名)を対象に集団質問紙調査を行った。

調査時の平均年齢は 20.87 歳 ($SD=1.39$)。調査時期は、2006 年 1 月から 2006 年 10 月であった。

(2)調査内容および測定尺度

- ①都筑(1996)による目標意識尺度。35 項目、5 件法。
- ②天貝(1995)による信頼感尺度。24 項目、6 件法。

③青年にとっての重要な他者

「あなたにとって影響を受けている人や大切だと思う人を最大10人あげて下さい」と教示した。

④デモグラフィック項目(性別, 年齢, 学年)

結果と考察

(1) 因子分析 信頼感尺度の各項目に「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」まで1点から6点を付与し、主因子法による因子分析を行った。まず固有値1.00以上の基準を設け、回転なしの因子分析を行った結果、5因子が抽出された。固有値の下降程度及びスクリープロット、因子の解釈を考慮し、先行研究と同様3因子を採用し、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。なお、共通性0.10以下の項目はなかった。その後、因子負荷量0.40という基準を設け、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を2回行った。その結果、6項目が削除され、計18項目が採用された。因子寄与率の合計は49.56%であった。天貝(1995)の「他者への信頼」の3項目、「不信」の2項目、「自己への信頼」の1項目が因子負荷量0.40以下で削除されたことを除き、因子構造は天貝(1995)と一致した。そこで、因子名は天貝と同様、「不信」「自分への信頼」「他者への信頼」とした。

同様に、目標意識尺度の各項目について、「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」まで1点から5点を付与し、主因子法による因子分析を行った。固有値1.00以上の基準を設け、回転なしの因子分析を行った結果、7因子が抽出された。固有値の下降程度及びスクリープロット、因子の解釈を考慮し、5因子を採用し、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。なお、共通性0.10以下の項目はなかった。その後、因子負荷量0.40という基準を設け、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果、3項目が削除され、計32項目が採用された。因子寄与率の合計は50.77%であった。都筑(1996)の「空虚感」に含まれる5項目のうち、3項目が削除され、1項目が「将来への希望」へ、1項目が「将来目標の有無」へと含まれた。そこで、先行研究の6因子から「空虚感」を他の下位尺度へと含めた5因子構造とし、その他の因子名は都筑を踏襲して、「将来への希望」「時間管理」「将来目標の有無」「無計画性」「将来目標の渴望」とした。

(2) 信頼性分析 目標意識尺度及び信頼感尺度において、因子分析の結果抽出された因子及び尺度全体の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した(Table2, Table3)。目標意識尺度の「将来目標の渴望」においてやや α 係数が低かったが、全体としての信頼性は高く、内的整合性が確認された。

Table 1 信頼感尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

項目番号	項目内容	F1	F2	F3	共通性	
第1因子「不信」						
15	今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである	.75	-.03	.10	.51	
8	所詮、周りは敵ばかりだと感じる	.74	.09	.01	.49	
13	人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	.67	.14	-.03	.41	
17	気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう	.62	.04	-.04	.39	
5	今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	.59	-.20	.25	.32	
19	私はなぜか人に対して疑り深くなってしまった	.54	.00	-.13	.39	
22	過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている	.48	-.07	.05	.24	
11	相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ	.44	.07	-.08	.21	
第2因子「自己への信頼」						
16	私は、自分自身を、ある程度は信頼できる	.14	.83	.02	.62	
18	私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う	.01	.68	.05	.50	
14	私は私で、決して他人にはとってかわることの出来ない存在であると思う	.00	.58	-.11	.28	
24	私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもっている	-.03	.55	-.12	.24	
12	私は自分の人生に対し、何とかやっつけていけそうな気がする	-.08	.45	.18	.40	
第3因子「他者への信頼」						
1	これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた	.14	-.20	.90	.52	
2	無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする	-.03	.21	.48	.43	
9	周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう	.00	.20	.45	.35	
20	一般的に、人間は信頼できるものだと思う	-.31	.06	.40	.45	
4	これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる	-.24	.15	.40	.46	
		固有値	5.65	2.03	1.24	
		寄与率(%)	31.40	11.28	6.89	
		累積寄与率(%)	31.40	42.67	49.56	
		因子間相関	F1	-.46	-.58	
			F2		.62	

Table 2 信頼感尺度の信頼性分析

	不信	自己への信頼	他者への信頼	全体
Cronbachの α係数	0.81	0.75	0.76	0.87
項目数	8	5	5	18

Table 3 目標意識尺度の信頼性分析

	将来への希望	時間管理	将来目標の有無	無計画性	将来目標の渴望	全体
Cronbachの α係数	0.81	0.86	0.85	0.85	0.67	0.86
項目数	11	5	6	5	5	32

Table 4 目標意識尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
第1因子 「将来への希望」						
29 自分の将来に希望が持たなくなるのがよくある	-0.80	.09	.03	.09	.00	.59
40 私は将来、自分の目標を実現できないのではないかと思います	-0.76	.10	.09	.12	.00	.51
12 私は、将来、自分の人生が悪い方向に向かっていくのではないかと思います	-0.75	.19	.05	.15	-.06	.51
32 自分の将来のことを考えると不安になる	-0.75	.08	-.05	.02	.28	.65
15 私は自分の将来に不安を感じている	-0.70	.08	-.06	.04	.23	.57
8 自分の将来は自分で切り開く自信がある	.63	.09	.07	.10	.12	.50
21 どんな困難が生じてても、将来うまくやっていく自信がある	.62	.24	-.08	.29	.02	.44
39 毎日がむなしと思うことがある	-.58	.09	.04	.14	-.11	.34
6 私の将来には、希望が持てる	.57	.08	.16	.07	.17	.54
27 私は将来、自分の問題を自分自身で解決できるようになれると信じている	.51	.21	-.02	.09	.16	.37
24 私は、将来、人生で最も重要な価値をもつことが実現されると確信している	.43	.26	.14	.07	.04	.42
第2因子 「時間管理」						
17 私は自分がしたいことを全部できるよう毎日毎日を管理して時間配分している	-.06	.82	-.03	-.05	-.08	.65
23 私は、その日にしなければならないことを計画してから活動する	-.03	.73	.06	-.02	-.08	.55
30 私は自分の時間を効果的に使うことを考えて、計画を立てている	-.03	.72	.08	-.10	-.02	.63
36 私はスケジュールに従って、すばやく物事を進めている	-.02	.63	.00	-.22	-.02	.56
10 私は混乱が生じないように日々の活動を管理している	.04	.57	-.15	-.10	.10	.38
第3因子 「将来目標の有無」						
3 私には、将来の目標がある	-.08	-.04	.92	.03	-.04	.71
22 私は将来に夢を持っている	.09	-.05	.78	.08	.09	.68
16 私には生きていくうえで目指す目標がある	.04	.06	.75	.04	.04	.64
1 私には、だいたいの将来計画がある	.00	.12	.66	.00	-.10	.50
14 私は目標を持って生活している	.06	.17	.59	-.08	.04	.56
35 私は遠い将来のことはあまり考えない	.02	.24	-.49	.31	.03	.30
第4因子 「無計画性」						
25 何かをやろうとしても、締め切りの日にならないとなかなか始められない	-.07	-.13	.07	.79	-.03	.73
31 私は何かをやる時には、時間ぎりぎりになってから急いでやる方だ	-.04	-.16	.01	.78	-.02	.77
37 他人から期日を指定されないと、いつまでもやろうとしない	-.06	-.04	-.04	.68	.05	.54
11 私は物事を時のはずみで決定してしまうことが多い	.05	-.10	-.03	.46	-.04	.27
18 私は計画を立てるのではなく、成りゆきにまかせて進めている	.06	-.34	-.14	.44	-.03	.50
第5因子 「将来目標の渴望」						
33 自分の将来の見通しがほしい	-.15	-.05	-.20	-.08	.65	.47
19 私は自分なりの人生目標がほしい	.11	.16	-.16	.03	.59	.38
26 将来のことを考えて計画的に行動できるようになりたいと思う	-.01	-.09	.20	.18	.51	.35
13 私は自分の将来計画を持ちたい	.10	-.06	.07	-.08	.51	.29
38 自分の将来について考えるのは大切なことだ	.00	-.17	.34	-.14	.46	.36
固有値	8.04	3.44	1.86	1.31	1.15	
寄与率(%)	26.44	10.69	5.88	4.27	3.50	
累積寄与率(%)	15.93	37.03	43.03	47.26	50.77	
因子間相関	F1	.28	.63	-.21	.06	
	F2		.32	-.43	.09	
	F3			-.28	.16	
	F4				.03	

(3) 性差の検討 因子分析の結果に基づいて、下位尺度に分類し、下位尺度合計得点を算出した後、項目数で割った値を信頼感及び目標意識尺度の下位尺度得点平均とした。男女別の下位尺度得点平均を Figure1, Figure2 に示した。信頼感尺度及び目標意識尺度の下位尺度得点に性差がみられるかを検討するために、独立変数を性別、従属変数を下位尺度得点とした t 検定を行った。その結果、信頼感尺度の「他者への信頼」において、女性の方が男性よりも得点が高かった ($d(335)=2.45, p<.05$)。

また、目標意識尺度においても同様に t 検定を行った結果、「無計画性」において、男性の方が女性よりも得点が高い傾向にあった ($d(335)=-2.34, .05<p<.10$)。その他の下位尺度には性差は見られなかった。

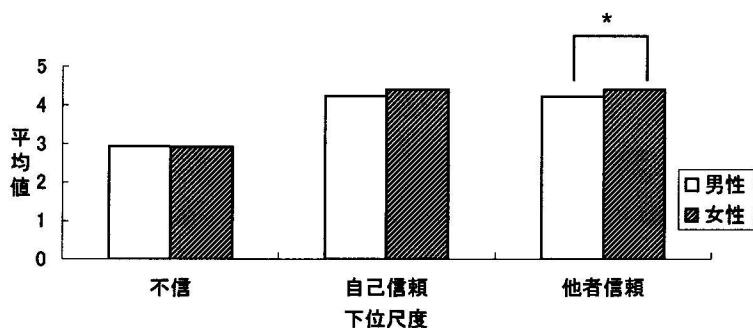


Figure 1. 信頼感尺度の平均値 * $p < .05$

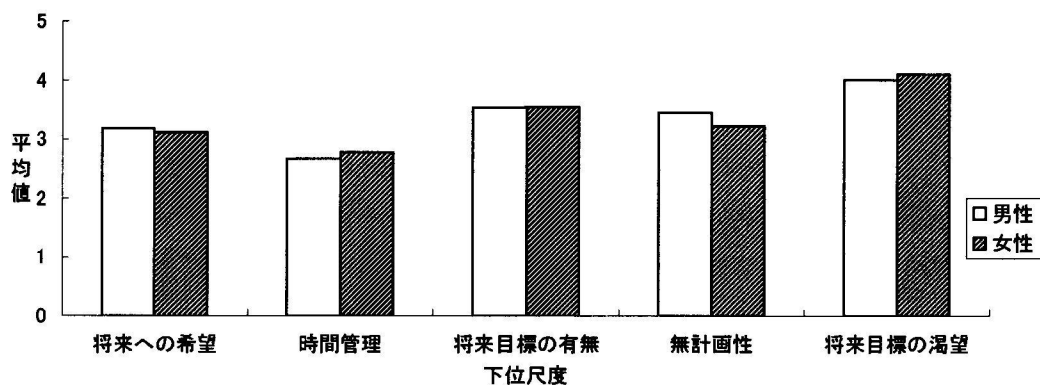


Figure 2. 目標意識尺度の平均値

(4) 未来展望と信頼感との相関 未来展望と信頼感との関連を検討するために、目標意識尺度と信頼感尺度の各下位尺度の相関係数を算出した (Table 5 から Table 7)。「将来への希望」と「自己への信頼」「他者への信頼」との間に有意な正の相関があり (自己への信頼: $r = .603, p < .01$, 他者への信頼: $r = .382, p < .01$), 特に「自己への信頼」との相関が高いことが示された。また、「将来目標の有無」と「自己への信頼」「他者への信頼」との間にも有意な正の相関があり (自己への信頼: $r = .267, p < .01$, 他者への信頼: $r = .309, p < .01$), 特に「他者への信頼」との相関が高いことが示された。さらに、「将来目標の有無」は「将来への希望」と相関が高かった ($r = .501, p < .01$)。

性差に注目すると、男性では「他者への信頼」と「時間管理」との間に正の相関があった ($r = .242, p < .01$) が女性では認められず、女性では「将来目標の渴望」と「自己への信頼」「他者への信頼」との間に正の相関があった (自己への信頼: $r = .211, p < .01$, 他者への信頼: $r = .205, p < .01$) が男子では認められなかった。また、女性の方が「将来への希望」と「自己への信頼」「他者への信頼」との間の相関が高く、男性の方が「将来への希望」「将来目標の有無」と「無計画性」との間の相関が高かった。

Table 5 未来展望と信頼感との相関(全体)

	不信	自己信頼	他者信頼	将来希望	時間管理	将来目標	無計画性
自己信頼	-.34 **						
他者信頼	-.53 **	.55 **					
将来希望	-.39 **	.60 **	.38 **				
時間管理	.02	.29 **	.19 **	.28 **			
将来目標	-.33 **	.27 **	.31 **	.50 **	.20 ** *		
無計画性	.16 **	-.24 **	-.12 *	-.25 **	-.61 **	-.25 **	
目標渴望	-.16 **	.17 **	.20 **	.03	.05	.12 *	-.01

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6 未来展望と信頼感との相関(男性)

	不信	自己信頼	他者信頼	将来希望	時間管理	将来目標	無計画性
自己信頼	-.38 **						
他者信頼	-.45 **	.59 **					
将来希望	-.44 **	.59 **	.36 **				
時間管理	-.01	.26 **	.24 **	.32 **			
将来目標	-.34	.30 **	.31 **	.49 **	.20 *		
無計画性	.22 **	-.29 **	-.14	-.38 **	-.62 **	-.32 **	
目標渴望	-.29 **	.10	.15	.01	-.02	.15	.02

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 7 未来展望と信頼感との相関(女性)

	不信	自己信頼	他者信頼	将来希望	時間管理	将来目標	無計画性
自己信頼	-.29 **						
他者信頼	-.59 **	.50 **					
将来希望	-.34 **	.63 **	.42 **				
時間管理	.03	.33 **	.15	.26 **			
将来目標	-.32 **	.25 **	.31 **	.52 **	.22 **		
無計画性	.13	-.21 **	-.09	-.17 *	-.59 **	-.19 *	
目標渴望	-.02	.21 **	.20 **	.06	.09	.07	.00

** $p < .01$, * $p < .05$

(5) 目標意識尺度によるクラスタ分析

① クラスタによる目標意識尺度得点の比較

目標意識尺度によってクラスタ分析を行った (Figure 3)。クラスタによって各下位尺度の平均値に差が見られるかを検討するために、独立変数をクラスタ、従属変数を各下位尺度得点とした一元配置分散分析を行った結果、いずれの下位尺度においてもクラスタの主効果が有意であった (将来への希望: $F(2,344)=37.70$, $p < .01$; 時間管理: $F(2,344)=144.25$, $p < .01$; 将来目標の有無: $F(2,344)=75.02$, $p < .01$; 無計画性: $F(2,344)=167.46$, $p < .01$; 将来目標の渴望: $F(2,344)=96.78$, $p < .01$)。そこで、Tukey 法による多重比較を行った結果、「将来への希望」においてクラスタ 1, クラスタ 2 よりもクラスタ 3 の得点が高く、「時間管理」ではクラスタ 3 > クラスタ 1 > クラスタ 2 の順で得点が高かった。「将来目標の有無」では、クラスタ 3 > クラスタ 2 > クラスタ 1 の順で得点が高く、「無計画性」ではクラスタ 2 > クラスタ 1 > クラスタ 3 の順で得点が高かった。「将来目標の渴望」では、クラスタ 2 > クラスタ 3 > クラスタ 1 の順で得点が高かった。

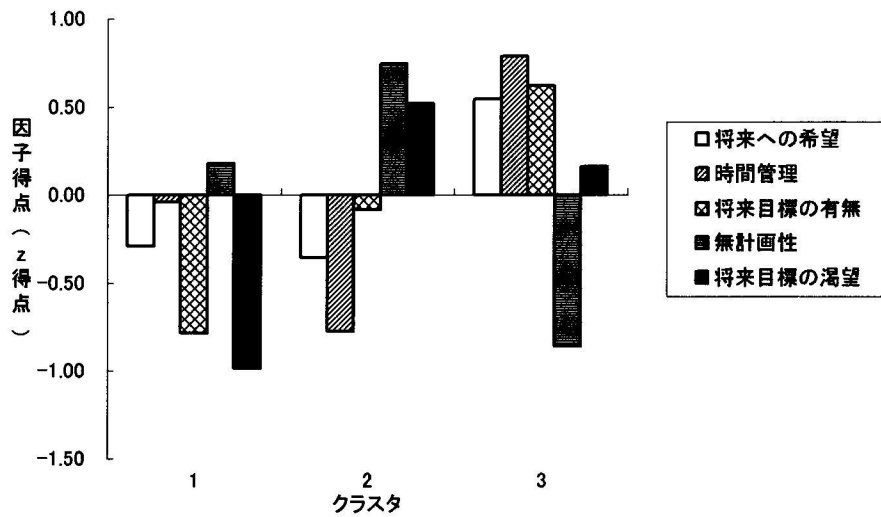


Figure 3. クラスタ分析

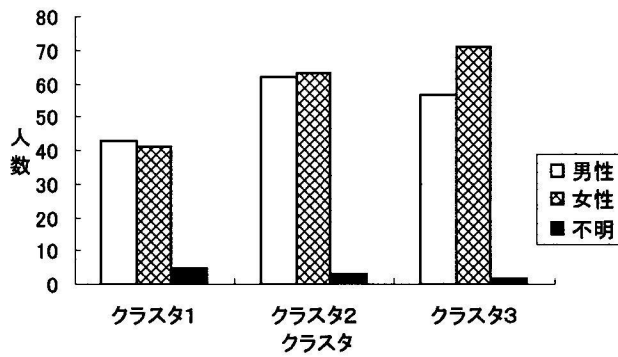


Figure 4. クラスタの男女比

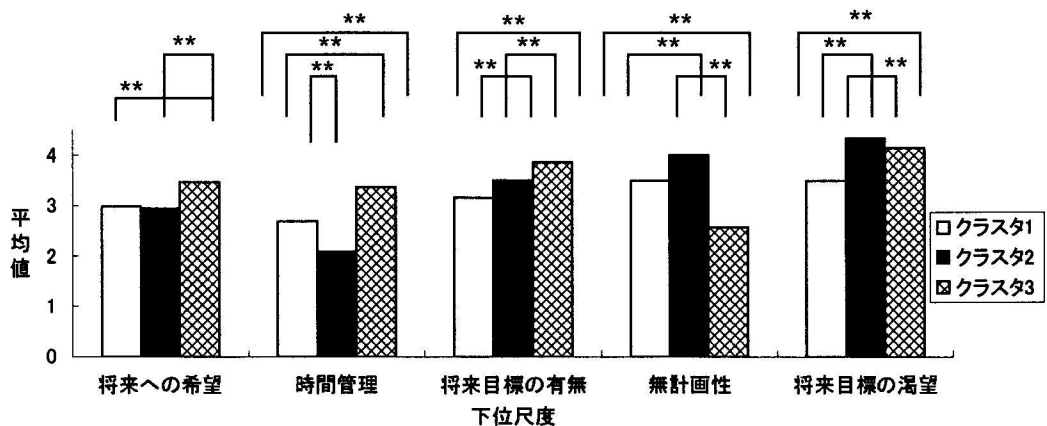


Figure 5. 目標意識尺度の下位尺度平均

** $p < .01$

② クラスタによる信頼感尺度得点の比較

クラスタによって信頼感尺度の各下位尺度平均値に差が見られるかを検討するために、独立変数をクラスタ、従属変数を下位尺度得点とした一元配置分散分析を行った結果、いずれの下位尺度においてもクラスタの主効果が有意であった（不信： $F(2,344)=11.52, p<.01$ ；自己への信頼： $F(2,344)=15.97, p<.01$ ；他者への信頼： $F(2,344)=8.87, p<.01$ ）。そこで、Tukey法による多重比較を行った結果、「不信」において、クラスタ1がクラスタ2、クラスタ3よりも得点が高かった。「自己への信頼」ではクラスタ3がクラスタ1、クラスタ2よりも得点が高く、「他者への信頼」ではクラスタ2、クラスタ3がクラスタ1よりも得点が高かった。

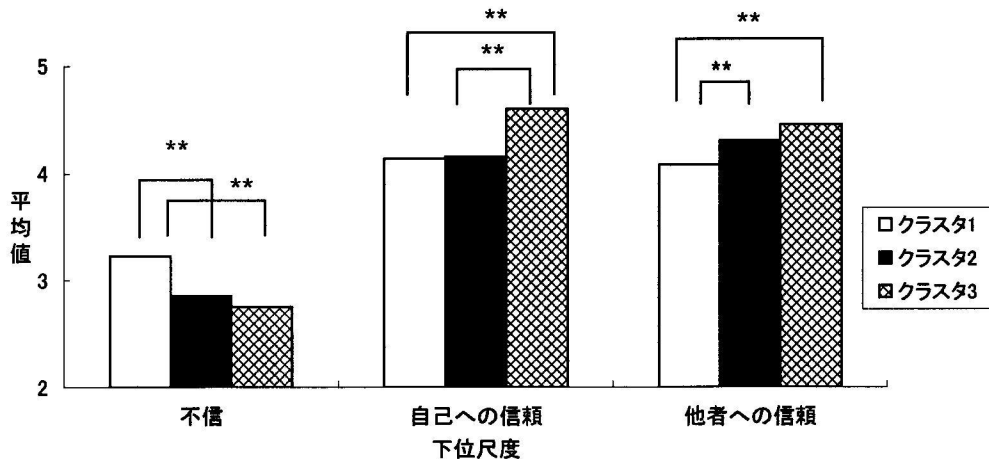


Figure 6. 信頼感尺度の下位尺度平均

** $p<.01$

③ 各クラスタの特徴

目標意識尺度の下位尺度得点によってクラスタ分析を行った結果、3つのクラスタが見出された。クラスタによって目標意識尺度及び信頼感尺度の各下位尺度得点に差が見られるかを検討した結果、クラスタ1は将来への希望や目標を有していない傾向にあり、かつ将来目標を渴望していないことが示された。信頼感に注目すると、他の2クラスタと比べて不信感が高いことが特徴であった。クラスタ2では、時間管理が低く無計画である一方、強く将来目標を渴望していることが示された。ある程度の他者への信頼感はあるが、自己への信頼感が低かった。クラスタ3では、将来への希望や目標を有すると同時に、計画性をもって時間管理を行っていることが示された。自他への信頼感が高く、特に自己への信頼が高いことが特徴であった。よって、各クラスタによって未来展望や信頼感には差異が見られ、その特徴が明らかとなった。

研究Ⅱ

目的

研究Ⅰの結果より、対象者を分類し、それぞれの群における未来展望の形成プロセス及び重要な

他者との関係の状態を明らかにすること、および未来展望を形成するプロセスと重要な他者との関係との関連という観点から語りを分析し検討することを目的とした。

方法

(1) 調査対象者及び調査時期

質問紙調査において面接調査への協力を依頼し、承諾した方 17 名（男性 4 名、女性 13 名）に面接調査を実施した。調査面接者のプロフィールを Table 8 に示した。調査実施時期は 2006 年 7 月から 11 月であった。

Table 8 面接対象者のプロフィール

クラス	対象者	調査時の年齢	性別	居住形態	家族構成	重要な他者	重要な他者数
1	A	22	女性	一人暮らし	母	友人A, B, C 宗教の師匠 恋人 母	6
	B	21	女性	一人暮らし	父, 母, 兄, 姉	父 彼氏 姉 先輩A, B, C 高校教師 大学教授	8
	I	25	男性	一人暮らし	父, 母, 第2人, 祖母	父 母 彼女 大学時代の部活の人 留学先の人	5
	J	22	女性	一人暮らし	父, 母, 姉2人	母 父 姉A, B 友人A, B, C, D, E 恋人	10
	L	20	女性	一人暮らし	父, 母, 弟	友人A, B, C, D, E 父 母 祖父 祖母	9
	N	20	女性	一人暮らし	父, 母	父 母 祖父 祖母 友人A, B 彼氏A, B 先輩 留学先の先生	10
2	D	20	女性	一人暮らし	父, 母, 姉	後輩(恋人) 父 母 姉 祖母A, B 友人A, B 高校教師 中学教師	10
	E	22	男性	一人暮らし	父, 母, 妹	父 母 祖父 祖母 いとこA, B, C, D, E, F 妹	11
	F	20	男性	一人暮らし	父, 母, 弟	父 母 友人A, B, C, D 後輩A	7
	G	20	女性	実家暮らし	父, 母, 弟2人	母 父 友人A, B	4
	M	21	女性	実家暮らし	父, 母, 妹, 弟	父 母 妹 弟 友人A, B 後輩 C, D 友人E, F	10
	P	20	女性	一人暮らし	父, 母, 弟	友人A, B, C, D, E 父 母 弟 祖母 小学校教師	10
3	C	21	女性	一人暮らし	父, 母, 兄	母 父 兄 高校教師 彼氏 友人A, B, C, D	9
	H	21	女性	一人暮らし	父, 母, 弟, 妹	母 友人A, B, C	4
	K	21	女性	一人暮らし	父, 母, 妹	父 母 妹 先輩 友人A, B, C, D	8
	O	20	女性	一人暮らし	父, 母, 姉2人, 兄	父 母 姉 兄 友人 高校担任 高校の校長 牧師 習字教室の先生 近所に住む女性	10
	Q	20	女性	一人暮らし	父, 母, 弟	父 母 彼氏 友人A, B, C, D, E, F, G, H	11

(2) 手続き

第三者の出入りがない大学の研究室において、1対1の半構造化面接を実施した。面接調査の実施前に、本研究の目的、得られたデータのプライバシー保護について説明した。その後、録音及び筆記記録、結果の公表についての承諾を得、面接者全員に面接承諾書に署名していただいた。面接時間は1回、60～210分であった。なお、調査に関しては広島大学の倫理審査委員会の承諾を得ている。

(3) 質問内容

質問内容は、以下の5つの視点で構成した。①現在の将来に対する考え（そのように考えるよう

になったきっかけは何か、そのために現在行っていることはあるかなど)、②人と関わることについての考えと質問紙にてあげられた重要な他者との関係のあり方とその方々への思い、③人生で初めて思い描いた未来とはどのようなものであり、またそれは何故だったのか、④小学校、中学校、高校の各時期に思い描いた将来はどのようなものであり、またそのきっかけは何だったのか、⑤小学校、中学校、高校の各時期に関わりの深かった他者と、その方々との関係や思い出、を尋ねた。調査対象者の自発的な語り任せ、足りないと思われる項目については適宜質問を行った。

(4) 手続き

面接終了後に逐語記録を作成し、対象者が語った「未来展望」と「重要な他者との関係」を意味のまとまりごとに抜き出し、同じ内容だと思われる発言ごとにグルーピングをし、それを時系列に沿って分類し、記述、ラベリングを行った。

結果と考察

(1) 未来展望の形成プロセス

青年の未来展望の形成プロセスを検討するために、手続きに示した手順に従って、逐語記録から対象者が語った未来展望に関する語りを意味のまとまりごとに抽出した結果、語りの総数は 86 個であった。最終的に「空想」「同一化」「限定された展望」「自己への気付き」「出会い・取り入れ」「経験からの展望」「目標設定」「積極的関与・没頭」「現実検討」の 9 個のカテゴリに統合され、これらを青年の未来展望形成プロセスにおける各段階の状態像とした。なお、「目標設定」とは、「自己への気付き」「出会い・取り入れ」「経験からの展望」を経て設定された具体的かつ現実的な将来目標を示すこととする。臨床心理学を専攻する大学院生 3 名（3 名分のデータでトレーニングを受けている）が独立に行った妥当性の検討の結果、未来展望の形成プロセスにおけるカテゴリの評定者間の一貫率は 95.35%であった。評定が一致しない項目は、評定者間での協議の上、決定した。各カテゴリの状態像は、Table 9 のような特徴が見出された。未来展望の形成プロセスの 9 個のカテゴリに当たる語りを各対象者ごとに時系列に沿って並べ、各対象者の未来展望形成プロセスの推移を分析した。また、各段階を構成する語りがあった時期の検討を行った結果、未来展望形成プロセスの各段階において、共通した時期の語りが多く見られた。そこで、それを各段階における主な時期とし、全対象者の未来展望形成プロセスの推移とともに統合したものを Figure 7 に示し、これを本研究における青年の未来展望の形成プロセスとした。

人生で初めて思い描かれる未来とは、実現可能性を考慮しない「空想」としての未来、もしくは親の価値観に沿った、親と「同一化」した未来である。そこでの将来とは、漠然としており、具体性がない、憧れとしての将来である。しかし、実現可能性に関わらずこのような未来を展望することは、これからの自身の成長を肯定的に捉えるものであると考えられる。その後、漠然とした将来ではなく、自己の興味や関心への気付きを得てそれを未来へと繋げた展望、理想となる他者と出会いその他者を理想のモデルとして自分の中へ取り入れた未来、または自らの実体験に基づいた未来を展望するようになる。このような段階では、「空想」「同一化」「限定された展望」とは異なり、自分なりの現実的な将来目標を設定し、その展望へと向かう。一時的に次の学校段階に狭められた「限

定された展望」を持つこともあるが、これは、これまでの空想としての未来の実現可能性に気付くこと、また高校受験という初めての人生に関わる課題へと関心が向くことが関連すると考えられる。こうして、「自己への気付き」「出会い・取り入れ」「経験からの展望」を経て、現実的に実現可能である将来目標を設定するが、ひたすらその目標へとひた走る状態であるのが「積極的関与・没頭」の状態である。この状態では、他の未来が描くことができず、そうなることが当然であるという自明の将来として未来を展望する。しかし、自らが設定した将来目標に向かう過程の中には、その実現に伴う迷いや不安、また実現できないという困難さが生じ、展望の転換を余儀なくされる場合がある。このような「現実検討」の場面では、自分の未来に対する考え直しが必要とされ、新たな展望を形成するために自分の興味・関心を今一度考える。そのような「自己への気付き」や、新たな展望上での理想となる人との「出会い・取り入れ」から新たな「目標設定」がうまれる。また、自らの経験から、これまで描いていた目標とは異なった未来を展望することで新たな目標を設定することもある。

このように、本研究で見出された青年の未来展望の形成プロセスとは、漠然とした将来から具体的、現実的な将来目標を設定する過程であり、Lewin (1951) の挙げた、青年期には時間的展望が拡大し、現実的未来が開けてくるという特徴を含むものであった。しかし、そこで設定された目標とは展望を転換せざるをえない状況に迫られた時に幾度となく捉え直されるものである。

Table 9 未来展望形成プロセスにおけるカテゴリーの状態像

カテゴリ名	状態像
空想	17名中12名にみられた(A,D,G,I,J,K,L,M,N,O,P,Q)。 現実的な将来や実現可能性のある将来ではなく、一時的な憧れや漠然とした将来を思い浮かべる状態。
同一化	17名中7名にみられた(A,B,E,F,K,M,O)。 親と同種の職業や親の期待・興味に沿った自己の未来を展望する状態。反発や不満を感じることはないが、そこで思い描かれる将来とは漠然とし、曖昧な状態。
限定された展望	17名中9名にみられた(A,D,H,I,J,K,L,M,N)。 長期にわたる展望ではなく、日々の生活や次の学校段階に狭められた展望。
自己への気付き	17名中10名にみられた(A,C,E,F,G,H,J,K,L,N,P,Q)。 自分自身の興味や関心、または特技などを活かして、それを自分の将来と結びつけた展望を持つ。
出会い・取り入れ	17名中8名にみられた(B,C,D,I,K,M,N,Q)。 理想となる人と出会い、その人を自己の中へと取り入れて理想のモデルとすることで自分自身の将来を思い描く。
経験からの展望	17名中5名にみられた(A,G,H,O,Q)。 自分自身の体験や、身近な人との体験から将来を展望する、実体験に基づいた展望。
目標設定	17名全員にみられた。 漠然とした抽象的な将来目標ではなく、具体的、現実的な将来目標の設定。
積極的関与・没頭	17名中2名にみられた(C,E)。 設定した目標に一直線に向かっており、それ以外の将来は想像することもできない状態。
現実検討	17名中10名にみられた(A,C,E,F,G,J,K,O,P,Q)。 これまで目指していた目標を現実的に考えたときに生じる迷いや不安、また実現できないという困難さに直面し、展望の転換を余儀なくされた状態。

()内のアルファベットは対象者を表す。

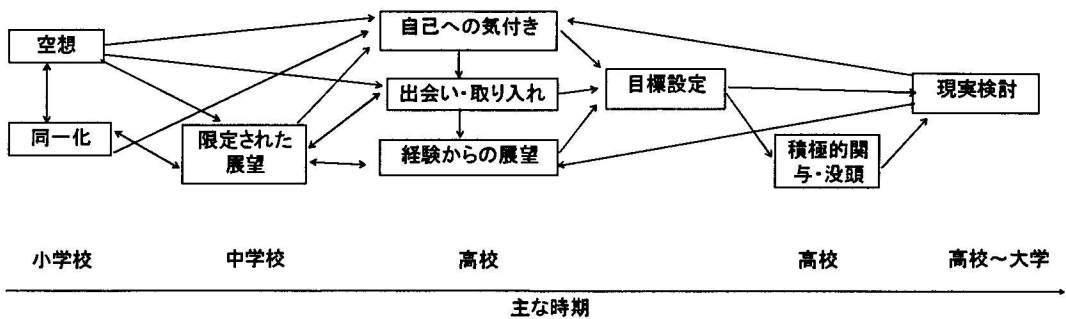


Figure 7. 未来展望の形成プロセス

(2) 各クラスにおける未来展望形成プロセス

クラスによって未来展望形成プロセスに違いがあるのかを検討するために、各クラスに属する対象者の未来展望形成プロセスの推移を統合したものを Figure 8 から Figure 10 に示した。その結果、クラス 1, 2 が、「空想」や「同一化」、「狭められた展望」を経て、「自己への気付き」、「出会い・取り入れ」、「経験からの展望」によって目標を設定するという一方向のプロセスを辿るのとは異なり、クラス 3 では「出会い・取り入れ」、「経験からの展望」から「狭められた展望」への逆方向の矢印が見られた。また、「自己への気付き」から「出会い・取り入れ」、「出会い・取り入れ」から「経験からの展望」という矢印があり、それらを経て目標設定をした後も、「現実検討」での考え直しの結果、再び「自己への気付き」「出会い・取り入れ」「経験からの展望」によって新たな目標を設定するという、いわば循環の形態となった。これは、他のクラスに比べてクラス 3 では、自分自身の興味関心や考えをじっくりと考え、問い直す姿勢が見られ、それによって未来展望の形成プロセスも循環することによって展望が深まっていくという形が生じたのではないかと考えられる。このように、例え同じカテゴリに分類されたものであったとしても、そこで語られた語りの質は個人によって、そしてクラスによって異なり、その差異は未来展望の質の差異であると考えられるであろう。クラス 3 に属する対象者の語りからは、未来展望形成プロセスの循環にともなって語りの質が変容し、より自分自身の将来に対する思考が深まっていくことが示唆された。

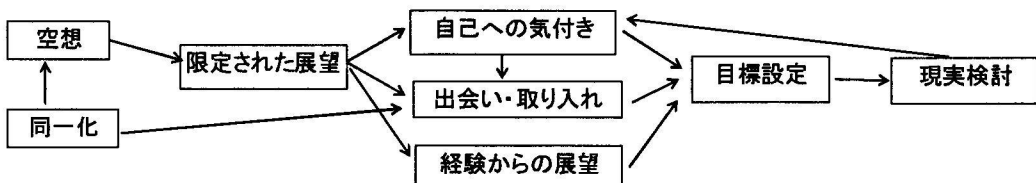


Figure 8. クラス 1 の未来展望形成プロセス

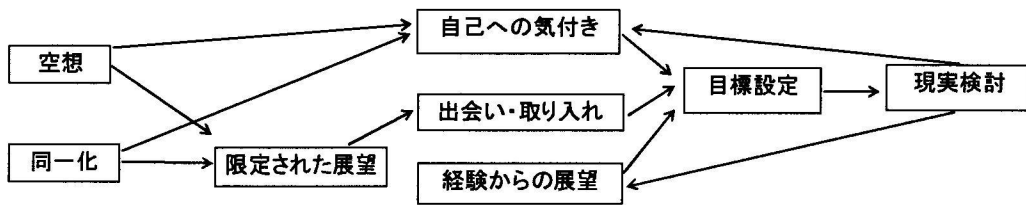


Figure 9. クラスタ 2 の未来展望形成プロセス

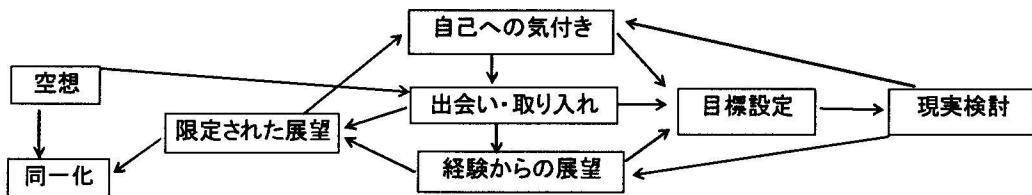


Figure 10. クラスタ 3 の未来展望形成プロセス

(3) 青年における「重要な他者」との関係

青年にとっての「重要な他者」とは勿論、未来展望に影響を与えるという側面のみではなく、生活や時間の共有、愛情の獲得、喜びや悩みの共感など、多様な意味を持つ。また、そうして育まれた他者との関係は、青年の「信頼感」に大きく影響を与えるものであり、その信頼感こそが未来に希望を抱く土台になると考えられる。面接協力者に、これまでの自分の半生を振り返り、小学校、中学校、高校の各時期に関わりの深かった他者と、その方々との関係や思い出を尋ねた。手続きに示した手順に従って、逐語記録から対象者が語った重要な他者との関係に関する語りを意味のまとまりごとに抽出した結果、語りの総数は、クラスタ 1 が 207 個、クラスタ 2 が 203 個、クラスタ 3 が 208 個であった。評定者間一致率はクラスタ 1 が 97.18%、クラスタ 2 が 95.93%、クラスタ 3 が 93.10%であった。評定が一致しない項目は、評定者間での協議の上、決定した。

その結果、小学校時代は、クラスタ 1 において、「家族との関わりを覚えていない」と答えた対象者、「親への不満」を語った対象者が半数いたことが特徴的であった。一方、クラスタ 2 とクラスタ 3 では、躰などの面から怒られたこと、親への不満を語りながらも、家族との情緒的交流がうかがえる語りが多数見られた。クラスタ 2 においても、「家族との関わりを覚えていない」「親と関わる時間の少なさ」を語った対象者が各 2 名いること、クラスタ 1、クラスタ 2 では友人との遊びについての語りが多く見られたのに対してクラスタ 3 では家族についての語りが多く見られた。Erikson が青年期のアイデンティティ確立の基盤を幼児期の母子関係による基本的信頼感の獲得であると述べたことを考慮すると、親を「厳しかった」と語りながらも情緒的交流が多く語られたクラスタ 3 の家族関係とは安定したものであり、そのポジティブな家族関係が、青年期の未来展望及び他者への信頼感に影響を与えていることが示唆された。

中学校では、いずれのクラスタにおいても友人関係の深化や広がりが多く語られた。共通の趣味

や話題を共有した友人関係が形成されるようになる一方、友人との間で様々な問題が生じることもあり、「対人関係上の困難」を経験することも少なくないことが示された。また、クラスタ3、クラスタ2では、これまで絶対的存在だった親への見方の変化が生じ、親への反抗が見られるようになる。これは、親からの自立を試みようとする「自立心の芽生え」であると考えられる。しかし、クラスタ1では、家族に対する肯定的な語りが多く、反抗などのエピソードは見られなかった。親と関わる時間の少なさや、親の目が自分に向いていないことに対する寂しさも語られ、クラスタ1では、未だ親から自立する状態にはなかったと考えられる。つまり、クラスタ3、クラスタ2では、反抗できる親、すなわちぶつかっていくことができる親の存在があったことが推察される。

高校では、対象者全員に、友人関係の更なる深化や広がりが見られた。対人関係上の困難も減少し、友人と密な関係を築くことがうかがわれる。この時期において特徴的であるのは、クラスタ3において「家族への肯定的感情」の語りが多く見られること、またクラスタ3、クラスタ2においては中学校に引き続き、親への反抗や意見の対立といった自立の試みが語られることである。クラスタ3、クラスタ2では、進路に関する親との意見の対立が語られ、自分の将来への取り組みや選択を親に相談し、時には対立しながらも自分の意見を伝える作業を行なっている様子がうかがわれた。クラスタ1で語られた家族とは、勉強への親の期待を感じていたことや家族と関わる時間のなさ、母への排斥などであり、他の2クラスタのような、対立しながらも意見を伝えるといった取り組みは見られず、家族との距離を感じさせるものであった。

大学入学時から現在においては、親元を離れて、これまでとは異なった生活を送ることでホームシックや新たな対人関係を築く上での困難を経験することが少なくないこと、しかし、このような困難場面においても、新たな友人関係を構築することによって困難を乗り越えることが示唆された。全対象者において現在深い信頼関係のある友人の存在が語られた。また、離れたことによって、親の見方にも変化が生じ、親のありがたみを感じ、これまで育ててくれた親への感謝が生じるようになる。全ての対象者において家族への肯定的感情が語られたことから、本研究における対象者の青年はポジティブな家族観を持っていることがうかがわれた。しかし、クラスタ1では全員が父親への尊敬・信頼を語った一方で、他の家族（特に母親）への不満や否定的感情に関する語りも見られ、家族に対する葛藤を抱えている様子が推察された。

Trommsdorff(1983)は、親の暖かさとその子どもの未来展望との関連を検討し、親を暖かいと知覚している子どもはそうでない子どもよりも未来が明るく、自分の力で未来を統制できると信じることを見出した。本研究においても、未来に希望や目標を有するクラスタ3では、幼児期の基本的信頼感の構築とともに、思春期には親からの自立を試みる働きが見られ、Trommsdorffの研究結果と同様の結果が見出された。しかし、クラスタ1では全ての対象者が現在家族へ肯定的感情を抱いている一方で、一部の家族への葛藤も語られ、親の暖かさを感じていながらも受け入れ難い違いを知覚している様子がうかがわれた。クラスタ1では、他の2クラスタのように親との意見の衝突という語りが見られなかったことを考慮すると、自分自身の意見を伝えることができる親子関係が重要であると考えられる。また、本研究では青年の他者関係を親子関係に限定せずにより包括的な検討を試みた。その結果、クラスタ3では過去から現在に至るまで他者との安定した信頼関係を構築

していることがうかがわれ、未来展望の形成には従来の研究で示されてきたような親子関係のみではなく、その他の他者との関係も重要な役割を果たしていることが示された。

総合考察

(1) 本研究で得られた知見

本研究の目的は、青年の未来展望の形成とそれに影響を与えると考えられる信頼感の基盤としての重要な他者との関係を明らかにすることであった。数量的尺度を用いた研究Ⅰでは、未来展望と信頼感の間には相関があることが示され、特に将来への希望は自己への信頼と、将来目標は他者への信頼と相関が高いことが明らかとなった。また、目標意識尺度を用いたクラスタ分析によって抽出された各クラスタには、未来展望及び信頼感の状態像に差異があることが示された。

研究Ⅱでは、青年の未来展望の形成プロセスと重要な他者との関係を半構造化面接によって質的に検討した。その結果、未来展望の形成プロセスには「空想」「同一化」「限定された展望」「自己への気付き」「出会い・取り入れ」「経験からの展望」「目標設定」「積極的関与・没頭」「現実検討」という9個のカテゴリが見出された。青年の未来展望の形成プロセスとは、漠然とした将来から具体的、現実的な将来目標を設定する過程であり、そこで設定された目標とは展望の転換を余儀なくされたときに幾度となく捉え直されるという循環の形態をしていることが示された。また、重要な他者との関係を検討した結果、全対象者が現在深い信頼関係のある他者がいると答えた一方で、過去の語りにおいてはクラスタによる差異が見られた。未来展望を持ち、かつ自己への信頼感を有するクラスタ3では、幼児期から現在に至るまでに安定した他者関係を築いており、それによって信頼感が構築されたと考えられ、未来展望の土台としての信頼感が実証的に示された。未来展望と重要な他者との関係について、未来展望の形成プロセスにおける「出会い・取り入れ」の語りを検討した結果、未来展望の形成には、将来のモデルとなる重要な他者と出会うことのみではなく、それを契機として自分自身の洞察も深まり、その他者との関係に自分なりの意味づけを行っていくことが重要であることが示唆された。

(2) 本研究における問題と今後の展望

本研究には以下のような課題がある。まず、本研究における調査対象者はA大学の学生に限定されており、これが一般大学生、または一般青年の特徴を示しているのかということに疑問が残る。青年にとっての未来展望は、大学を選択する際に直面することも多く、本研究のほとんどの対象者においても、現在の目標とは大学入学以前に抱いたものであった。その点では大学に入学した時点である程度の未来展望を有していると考えられること、未来展望を尋ねた際に全員が職業に関する展望を一番に述べたことを考えると、これは本研究の対象者の特徴であると考えられ、今後はより幅広いサンプルによる研究を進めることが必要であると考えられる。

また、重要な他者との関係についても、全対象者において、現在深い信頼関係のある他者の存在と家族への肯定的感情が語られ、本研究の対象者がポジティブな家族観を有していることが示唆された。今後、臨床的見地から未来展望と重要な他者との関係を検討するためには、家族に対する否

定的感情や不信感について検討することも必要であり、臨床群をも含めた幅広いサンプルの必要がある。そして、一般青年群と臨床群との未来展望の形成プロセス、展望内容や重要な他者との関係を質的に比較検討することによって、臨床的応用可能性が見出されると考えられる。加えて、本研究では、大学生の未来展望と重要な他者との関係に限定して研究を行ったが、中学生や高校生に対しても同様の調査を行い、学校段階ごとに未来展望と重要な他者との関係がどのように異なるのかを明らかにすれば、青年の未来展望と重要な他者との関係を発達の的にみることもできるであろう。

引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, 1, 1-117. (エリクソン, E.H. 小此木啓吾訳 (1982). 自我同一性 —アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- 日高三喜夫・前田重治 (1989). 青年の時間的展望に関する研究 —年齢と自我強度の効果— 九州大学教育学部紀要, 34, 211-220.
- 北村晴朗 (1983). 希望の心理—自分を生かす— ラポール双書
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: Harper. (猪股佐登留訳 (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 光富隆・長尾博 (2000). 未来展望の形成に関する一考察 —社会化の観点から— 活水論文集, 43, 1-22.
- 大橋明・恒藤暁・柏木哲夫 (2003). 希望に関する概念の整理—心理学的観点から— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 29, 99-124.
- 杉山成 (1996). 時間的展望の関連要因に関する研究の動向 立教大学紀要, 38, 39-52.
- 杉山成 (2000). 未来展望の発達傾向とその関連要因の検討 小樽商科大学人文研究, 99, 39-60.
- 白井利明 (2004). 時間的展望とアイデンティティにおける家族成員間の関連 —青年期後期の子どもとその親である中年期夫婦を対象にして— 大阪教育大学紀要, 52, 241-251.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- Trommsdorff, G. (1983). Future orientation and socialization *International Journal of psychology*, 18, 381-406.
- 都筑学 (1996). 大学生の時間的展望 —構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部